

平成 28 年度

慶應義塾大学入学試験問題

法 学 部

論 述 力

法学部の論述力試験について

この試験では、広い意味での社会科学・人文科学の領域から読解資料が与えられ、問いに対して論述形式の解答が求められる。試験時間は90分、字数は1,000字以内とする。その目的は受験生の理解、構成、発想、表現などの能力を評価することにある。ここでは、読解資料をどの程度理解しているか（理解力）、理解に基づく自己の所見をどのように論理的に構成するか（構成力）、論述の中にどのように個性的・独創的発想が盛り込まれているか（発想力）、表現がどの程度正確かつ豊かであるか（表現力）が評価の対象となる。

注 意

1. 指示があるまで開かないこと。
2. 受験番号と氏名は、解答用紙のそれぞれ指定された箇所に必ず記入すること。
3. 解答に際し、解答用紙の「注意」を必ず読むこと。
4. 下書きの必要があれば、メモ用紙を利用すること。解答用紙の余白には何も書いてはいけない。
5. この冊子は、問題用紙・メモ用紙を含めて7頁ある。試験開始後直ちに落丁、乱丁等の有無を確認し、異常がある場合には遅滞なく監督者に申し出ること。3頁から6頁はメモ用紙である。

〔問題〕

次の文章を読んで、トインビーの文明観とその根拠を四〇〇字程度でまとめ、世界文明は「来ようとしている」という指摘について、世界で今起きている具体例に触れつつ自分の意見を述べなさい。

トインビーは世界史の未来を、文明という角度からどのように見通しているだろうか。それは、現代までの諸文明の動きのなかで、何をもちとも主導的な傾向とみるかによつてきまってくることである。もつとも巨視的にいって、ここ数世紀来の世界史の動きのなかで、トインビーにもつとも主導的とおもわれるものは、西洋文明の圧倒的優位ということである。この事実はだれの目にもあきらかである。西洋文明のこの優位を永続的なものと多くのひとが想定している。

だが、トインビーはそうは考えない。西洋文明は、非西洋文明にやがて主導権を奪われ、非西洋の風下にたたされるだろう。今日まで非西洋の諸文明が西洋から学んでいるように、やがて西洋文明が、非西洋の諸文明を学ばされるにいたるだろう。このような相互の学びあいのなかから、その名に値する世界文明が、姿をあらわしてくるだろうというのが、トインビーのもつとも長期的な見通しである。

つまり、世界は一つになり、世界文明がくるだろうというのである。世界がなんらかのかたちで一つになるだろうことは、だれでもうすうす予想している。だが、それにいたる過程で、非西洋の諸文明のはたすだろう役割が徐々に大きくなり、世界史における比重が、西洋から非西洋の側にかかってくるだろうと、トインビーほど明確に尖鋭に、だれもが意識しているとはかぎらない。多くのひとは、現に西洋文明がそのまま世界文明だと観じ（註一）ている。

世界文明は未来の可能性ではなく、すでに西洋文明に体现されてきていることになる。たとえば、世界文学といえば、西洋文学のことときめこんで、そのおかしさをかえりみないのが、その良い証拠である。これは、わがアカデミーの慣習で、東洋史といえば中国史だときめこんでいるのにいくら似通っている。東洋には、中国以上にながい歴史のあるインドもあれば、西南アジアもある。これらは中国と同様に、いや、それ以上に重要なのに、黙殺され、東洋史から除外されている。中国だけが東洋でないように、西洋は世界ではない。そ

れは数ある文明の一つにすぎない。

ただ二、三世紀来、西洋文明が圧倒的に優位していたため、非西洋の諸文明が西洋の支配下または影響下にあつた。その経験から、西洋が世界のように錯覚されただけである。じつは、西洋文明がそのまま世界文明ではなく、西洋文明が他の諸文明に圧倒的に優位し、西洋化（西洋の影響）が世界的傾向となつていくことにすぎない。

西洋化、つまり西洋文明の理想や思想、技術や制度をうけいれているのは、非西洋の諸文明であつて、主体はこちら側にあり、西洋は客体にすぎない。客体にすぎないという意味は、西洋化というような、外来文明の徹底的な影響を近代の西洋文明はうけない、そういう仲間には入れない、ということである。西洋化しているのは、人類の圧倒的多数であり、西洋化の深度はますますふかまり、その速度はますますはやまり、思いもそめない事態がおこってくるであろう。というのは、一つの文明の内的発展ではなく、二つの文明の出会いからは、より予測しえないことがおこるからである。

西洋化というこの出会いに、意味あり価値あることがおこるとすれば、西洋化している非西洋の側に、世界史の比重がかかってくるであろう。したがって、西洋化がどう進展し、その結果がどうなるかを十分検討せずに、世界史の未来、いや一歩先さえトする（註二）ことはできない。

なぜ、トインビーは、西洋文明の優位が永続せず、非西洋が優位に立つと予測しているのであろう。西洋が優位していたのは、ナシヨナリズムと近代テクノロジーとの結合のおかげである。しかし、ナシヨナリズムが行きつまり、テクノロジーは容易に伝播可能であるとすれば、早晚西洋の優位する時期がさるであろう。

ナシヨナリズムの行きつまりとは、二重の意味をふくんでいる。十九世紀の近代西洋の古典的ナシヨナリズムは、国王の手から人民の手へと国家を奪還することによつて、初期はきわめて創造的であり、活動的であつたが、産業革命以後、一族でつくられた一国家の規模では狭小となり、また経済の相互依存性のために、その絶対主権を軍事的にはむるんのこと、経済的にも、ひいては政治的にも維持することが困難となつた。

ナシヨナリズムの破綻というべき二つの世界大戦の結果、「ヨーロッパの矮小化」とトインビーのいう現象がおこり、周辺のな大国に主導権を奪われたのは、古典的ナシヨナリズムの行きつまり、いや、その主導性の終焉を告げるものであり、国土のより広い、したがって、資源のより豊かな、人口のより多い

広域的な連邦国家でなくては、もう主導的役割を果たしえない時代に移行した兆候である。

他方、古典的段階を越えて帝国主義的段階に達したナショナリズムは、権威をふるって来たが、非西洋の側での抵抗の、あるいは対抗のナショナリズムを誘発し、文字通りの世界戦国時代を現出しているという意味で、行きづまっている。

(中略)

西洋の第二の優越点であるテクノロジイにかんしていえば、これは、すべての文化分野のなかで、もつとも抵抗なく他の文明が受容しうるもの、他の文明で再生産しうるものなのである。テクノロジイは中立的性格をもっているといわれるが、宗教または思想や制度や芸術などのように、特定の文化に固着する土着性に稀薄で、ある文明から他の文明へかなり容易に伝播しうる超越性を備えている。この特異な性格は、技術のもつ抽象的な合理性のゆえであろう。

とすれば、近代テクノロジイは西洋から非西洋の諸文明に、時のたつにつれて多少の遅速はあれ万遍なく行きわたるであろう。西洋起源の近代テクノロジイを他の諸文明が消化しえないなどと考えることはできない。西洋はこれを永続的には独占しえない。圧倒的多数の非西洋の諸文明がこれを修得し、再生産するにいたれば、世界史の比重が非西洋の側にかかってくるのは、歴史的感覚をもっているものにはあきらかである。歴史的感覚をもつものは、現在を固定して断定的に考えない。現在は移りゆく一つの時点である。歴史的にみれば、主導的な国または地域はつねに移行していることを、歴史的経験に徴し(註3)で知っている。

近代いらい、ヨーロッパの内部でも、主導的な国が五〇年おきに変わつたといわれるが、今世紀に入って二つの大戦を経過するうちにヨーロッパは非ヨーロッパの米ソに追いぬかれてしまった。この米ソも永続的に主導権を掌握しつづけるかといえば、疑問である。中国はすでに頭角をあらわしている。トインビーは米ソについて、中国の今後はたずである役割を重く見積っている。

非西洋に比重がかかると予想するのは、技術が受容しやすいう理由だけではあるまい。トインビーが「勝利の陶醉」と呼ぶ規則性が、ここでも働いていないとみているであろう。勝利者は、いまの勝利感に酔って、その優位的地位が永続するかのよう錯覚し、当初の精神的緊張をうしない、「オールをやすめ」、精神的に弛緩し、やがて頹廃していく。ところが、いま傷められているものは、屈辱と無念をかみしめ、精神的な緊張をやどしている。やがて、

そのあるものに実力がつき、そして拮抗から攻守が逆転していく理由がここにある。「先なるものが後に」なるのは、多くのばあい、先なるものの「勝利の陶醉」のせいである。それは、歴史の鉄則であり、人間集団の創造の可能性とその持続の限界を如実にしめすものである。西洋文明も例外ではありえないだろうというのが、トインビーの歴史的知見である。

右のことを『歴史の研究』第二三巻『再考察』(原書一九六一刊、下島連他訳第21、23巻、「歴史の研究」刊行会、のちに経済往来社、一九六六、六七)からの引用でたしかめておこう。

〔中略〕西洋化は、十七世紀以後の西洋文明をば、全人類に共通の文明にまで変形する道をひらいた。この来ようとしている世界文明は、それが西洋起源であるため、否応なく西洋の枠組のなかで、西洋の基盤のうえに、その履歴をはじめであろう。そして、この文明にたいする西洋の率先的な貢献は、その後もながいあいだ重要なものであらうとおもわれる。しかしまた、時がたつにつれて、世界文明以前の他の諸文明のなす貢献がますます重要になってくるようにおもわれる。以前は西洋文明であったこの世界文明は、それにさき立つすべての文明の遺産のなかの最良のすべてをやがてわがものとし、同化し、調和させるだろうと期待してよからう。(原文五二八、九ページ、邦訳九八五ページ)

ここで大切なことは、西洋文明がそのまま世界文明ではなく、西洋化によって世界大にひろがることで、それが世界文明に変質し、やがて非西洋の側に主導権が移っていくだろうということである。この世界文明は、「来ようとしている」のであるから、まだ来ていない。だが、この文明のはじまりは、「西洋の枠組のなか」で「西洋の基盤のうえに」できるだろうというのである。だから、当初は西洋への抵抗はつづくであろうが、やがて、世界文明の中心が非西洋に移るに依りて、当初のように内的対立としてではなく、内的多様性として、より大きい枠組のなかにはまってしまうと考えられる。

山本新『人類の知的遺産74 トインビー』(講談社、一九七八年)。試験問題として使用するために、文章を一部省略・変更した。

註1 観するに心に思い浮べて観察する

註2 トするに判断し定める

註3 徴するに見比べて考える

